

私は結婚後、子育てが一段落するといろんなパート勤めをした。大学図書館や、小学校の図書室の司書がやはり、やりがいがあつて楽しかった。でも生活のために苦手な分野にもいろいろ挑戦(?)した。消防学校の賄いや大学寮食堂の賄いなど。失敗が多く、何度も挫折した。精神的にも体力的にも厳しいものが多かった。地区の農協加工場の豆腐づくりは朝早くからたいへんだった。行事があるときは徹夜でフラフラになりながらつくった。腰を痛めて一年持たなかったときは悔しかった。

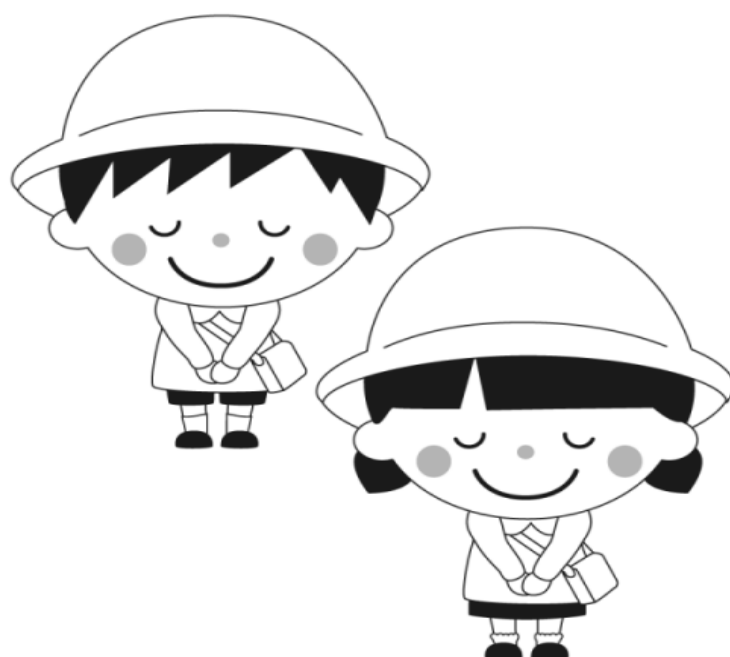
老人介護施設の清掃は、自分の健康のためにもいいと思つてはりきつてやった。でも、そのうち気がついた。施設の職員で私たちに挨拶してくれる人とそうでなく無視して通りすぎていく人がいることに。無視するのは若い男子職員に多かった。どうやら彼らは掃除婦を差別というか、見下しているのかもしれない。やめた後、私は、いろんなところで掃除している人に出会うたびにひとこと声をかけることにしている。

「ご苦労さまです」

「お世話になります」

「たいへんですね」

すると、必ず彼らの表情がにこやかにくずれる。自分がその立場を経験してみないと気がつかないことがたくさんあると思つた。



蛍

福島 みゆき

毎年、五月末から一ヶ月ほど、わが家の前を流れる小さな谷川に蛍が登場する。私と夫は毎晩二人で手を繋いでたつぷり鑑賞。一匹、二匹と数えながら。

私が生まれてはじめて蛍を見たのは、ここの蛍だ。転勤族の父と共に日本のあちこちに住んだが、たいてい街の中だったので、豊かな自然は知らずに成長した。

結婚してはじめて『農村』に暮らすことになった。まだ新婚間もないころ、夫が「蛍を見に行こう！」と連れ出してくれた。玄関には夫の下駄しかなかったので、私は夫に背負われて外に出た。なんとそのころはまだ瘠せていたのだ！ 今となっては信じてもらえないが。

家から出て十数歩のところの谷川に蛍がほのかに光りながら飛びかっていた。不思議な美しさに心奪われた。

それから幾星霜……。息子が小学生のときに、近くの田からたくさん蛍を採ってきて放したので何百匹も生息し、一大名所になったりもした。そのうち農薬のせいか激減し、一年に数匹が細々と出現するだけとなった。

集中豪雨に見舞われて川が決壊し、ところどころコンクリートで補修された。猪が蟹をとるためか、路肩を掘りくずした。何年か前から流れ

をよくするために地区の人全員で川の清掃をするようになった。「ああ、蛍は環境の変化に弱いのに！」私は気が気でなかった。

いろんなことを乗り越えて、今も蛍は【生】をつなぎ続けている。多い年は十五匹ぐらいいる。

私と夫は蛍といろんな話をする。

「今年もよくきたね！」

「たいへんだったね」

「来年もきてね！」

蛍はかなり広範囲に動き廻る。畑の方に行ったり、庭に入りこんだり、山の方へ行ったり、地面にとまったり、車の上に乗ったり、朝、台所の窓のところにいたりする。

私たち夫婦にとっては蛍と幸せな時間をすごすことができたが、この先のことを思うと心細くなる。ずっと絶えずに！と祈っている。

